

**基本情報**

試験時間：60分 満点：100点 解答方法：番号選択式

**出題範囲**

「現代の国語」「言語文化」※古文・漢文は除く

**難易度**

基礎～標準レベル

**出題内容**

年度	大問	小問	出題内容
2025	一	9問	八木沢敬『ときは、ながれない 「時間」 の分析哲学』 漢字の読み問題、空欄補充問題、読解問題
	二	9問	鈴木一義「日本のものづくりの源流——田中久重に学ぶ」 池内了『高校生のための人物に学ぶ日本の科学史』所収 漢字の書き問題、空欄補充問題、脱文挿入問題、語義問題、読解問題

**傾向**

- 文章問題2題で構成されています。文章の字数は、それぞれ4,500～5,000字程度で、例年、合計で10,000字程度の分量でしたが、2025年度は2題とも4,000字程度の文章で、やや短くなりました。大問一は、時間の存在について、「可視化」できるかどうかという観点から例を挙げながら考察する文章でした。大問二は、日本では、江戸時代に殿様や知識人によって知識が社会に普及したことで識字率が高まったのだと述べるとともに、外国の知識を日本語に訳して取り入れる、翻訳文化の重要性を指摘する文章でした。問題形式は、漢字問題、空欄補充問題、脱文挿入問題、語義問題、読解問題で構成されています。以下では、問題ごとに対策を記します。

**対策**

- 大問一
 

問一 漢字の読み問題で、傍線部の漢字と同じ読み方をする漢字が含まれる熟語を選ぶ形式でした。本問では、「星霜」と「勤行」のように、高等学校で学習する読み方を含む熟語が選択肢として挙げられました。傍線部の漢字と、選択肢として挙げられている漢字とをすべて正しく読むために、高等学校までに学習するすべての漢字の読み方を覚えておきましょう。

問二 空欄補充問題で、漢字一字を選ぶ形式でした。空欄補充問題は、文脈を踏まえ、何を補充すれば意味が通るかを考える必要がありますが、本問は訓読みで動詞となる漢字が出題されていることから、漢字の読み方も手がかりになりました。空欄の直前や直後に着目し、漢字を入れた際に正しく読めるかを確認できるようになれば、類題にも対応できるでしょう。

問三 空欄補充問題で、三文節以上の表現を選ぶ形式でした。問二と同様、文脈を踏まえる必要はありますが、本問は空欄直後の「批判」と「ポイント」の内容を考える必要があるため、空欄の直前や直後を読むだけでは正答できないものでした。空欄補充問題では、空欄を含む一文だけでなく、空欄を含む段落、さらには前後の段落も精読しましょう。

問四 空欄補充問題で、熟語を選ぶ形式でした。文脈に合う言葉を選ぶためには、選択肢として挙げられているものの語義をすべて理解する必要があります。このような問題に対応できるよう、普段の読書や学習の中で語義がわからない言葉に接した際に必ず調べることを習慣づけ、語彙を増やしましょう。

問五 読解問題で、傍線部の理由が問われました。本問は、抽象的なことを傍線部の具体例で説明した際の理由を考える必要がありました。文章で述べられている抽象的なことを具体的に考える、そして、その逆もできるようになれば、読解の役に立つでしょう。

問六 読解問題で、「最良の説明への推論」のために必要となるものが問われました。本問は、「最良の説明への推論」そのものを正確に理解した上で、それに必要な概念を表す言葉を考える必要がありました。このような問題では、文章の内容をまとめ、別の言葉で言いかえる力が要求されます。「つまり……である」など、内容を簡潔にまとめることができれば対応できるでしょう。また、このように文章の内容をまとめる力を身につけることは、読解力の向上にもつながります。

問七 読解問題で、筆者が傍線部のように考える理由が問われました。筆者の考えを読み取るためには、文章全体を精読し、筆者が対象（本問の場合は視覚や触覚）をどのように捉えているかを考えましょう。

問八 読解問題で、文章の内容に合致しない選択肢を選ぶ形式で、文章全体の内容理解が問われました。読解問題全般に通じることでもありますが、特にこのような問題では、本文を読む前に選択肢を読み、何を意識して読み進めるべきかを確認してから本文を読むことで、解答しやすくなります。解答の際の手がかりや根拠となりそうな箇所は、線を引きながら読むことも有効です。

問九 読解問題で、文章の展開が問われました。本問は「何を論じているか」よりも、「どのように論じているか」に着目する必要があります。評論を読む上で、文章がどのように展開されているかを意識することは、内容を理解するためにも重要です。主題は何か、どのような具体例を提示しているのか、何を根拠にしてどのような結論を導いているのかを意識しながら読む練習をしましょう。

## ● 大問二

問一 漢字の書き問題で、傍線部の漢字と同じ漢字を用いる熟語を選ぶ形式でした。本問では、「柄（がら）」と「横柄（おうへい）」のように、音訓の両方から漢字を導くことができるかを問うものが出題されました。大問一の間一と同様、高等学校までに学習するすべての漢字を、読み方とその漢字を用いる言葉とともに覚えるようにしましょう。

問二 空欄補充問題で、接続詞を選ぶ形式でした。「順接」「逆接」「並列」「累加」など、どの意味で使用される接続詞なのかを覚えておきましょう。その上で、空欄の前後の語句や文、段落がどのような論理関係にあるのかを読み取り、その関係を表す接続詞を選びましょう。また、このような問題に対応するためだけでなく、そもそも接続詞は、文章の内容を理解する上で重要なものです。問題になっているかどうかを問わず、意識して読むようにしましょう。

問三 空欄補充問題で、熟語を選ぶ形式でした。大問一の問四と同様、選択肢として挙げられている言葉の語義を理解できるよう、語義のわからない言葉に接した際に調べる習慣をつけましょう。

問四 脱文挿入問題で、文章中から抜け落ちていて一文を入れるのに適した箇所を選ぶ形式でした。このような問題は、脱文に含まれる言葉を手がかりにします。本問では「科学の始まり」が何を指すのかを考える必要がありました。また、脱文の中に指示語や接続詞などが含まれている場合には、その指示語が何を指しているのか、前後との論理関係はどうなるのかを考えることで解答できます。加えて、選択肢の箇所の前後を丁寧に読み「このままでは文意が通らなくなる（不自然になる）」ということに気付けるようになれば、十分に対応できるでしょう。

問五 読解問題で、本文の内容理解が問われました。本問は、選択肢の内容が、傍線部の具体例として本文に挙げられている内容と一致しているかを読み取る必要がありました。選択肢で挙げられていることは、本文全体を通して述べられていました。このような問題も、大問一の間八と同様、本文を読む前に選択肢を読み、何を意識して読み進めるべきかを確認し、必要に応じて本文に線を引きながら読むとよいでしょう。

問六 読解問題で、指示語の内容が問われました。本問は、選択肢にある「発見」や「啓蒙」、「推論」という言葉が本文にはなく、大問一の間六と同様、文章の内容をまとめ、別の言葉で言い換える力が要求されました。このようなことができるように、普段から文章を要約するなどの練習をしましょう。

問七 語義問題です。「走り」と「ハンデ」の意味が問われました。語義がわからない言葉を調べる習慣によって語彙を増やすことは繰り返し述べましたが、「何となく語義を知っている言葉」にも注意をしましょう。普段使っている言葉でも、語義を問われて答えに困るような曖昧なものがあれば、一度意味を確認してみましょう。

問八 読解問題で、傍線部に関する筆者の考えが問われました。本問は、傍線部を含む段落と、その直前の段落に着目すれば解答することができました。このような問題では、形式段落だけではなく、意味段落も意識することで、問題に関係のない箇所を読むことがなくなり、解答にかかる時間を短縮することができるでしょう。

問九 読解問題で、対応する傍線部がなく、問八と同様、本文の最後の二段落の内容理解が問われました。傍線部のない問題は、文章全体の内容を問われる場合もありますが、いずれにしても、設問の条件や選択肢を先に読んでから本文を読めば、解答の根拠を見つけやすくなるでしょう。